夏の思い出

ハレルヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏の思い出

【Ｎコード】
Ｎ８９３８Ｎ

【作者名】
ハレルヤ

【あらすじ】
それはとっても暑かった夏のちょっぴり不思議な思い出のお話です。

突然の梅雨明けに驚きながら、照りつける太陽に小言を叫んでも一向に涼しくならない。
いつも梅雨明けとはこんなものだ。
そう、もっと、この空が青くまぶしかったあの頃から。
今はもうオトナの世界に染まってしまったボクたちの暑い夏の思い出。子供でもない大人でもないボク達の冒険がそこに在った。

もともと、1人でいるのがスキだったボクは友達と呼べる人もいなく、高校にも通わなくてはいけない苦痛を感じていた。
それは恋愛対象が同姓だったこともある。

「どうせ、いじめられるんだ」

そんなことを思っていたボクに入学初日に親友が出来た。
それも男と女各一人ずつ。
ボクは美術部に入部した。

最初にボクに声をかけてきたのは双子の妹、ミキ。その隣にはいつも兄のカズがいた。ミキは妹なのになぜか姉さん口調。カズは優しくていつもミキの言葉に頷いていた。
その二人に誘われて美術部に入ったが、そこにはもっと面白い先輩が2人ほど生息していた。
冒険の扉が開き始めた瞬間だった。

美術部に生息していた先輩二人。ともに2年生で身長が１８０ｃｍ近くあるサチ、どう見ても柔道部じゃないかと思えるユカ。学校でも有名な2人だった。ボクとサチ、ユカ、ミキ、カズの5人。

その年の夏休み。スケッチ合宿と命名されたイベントで世にも奇妙な体験をするメンバーだった。

スケッチ合宿は夏休みが始まってすぐの日曜日から3日間。場所は美術部の顧問の斉藤先生の別荘。
ただし、その中身は別荘の掃除。
一年に一回、草ぼうぼうの別荘を綺麗にするのが目的。
その代わり、食事は先生持ちで、天然温泉付き。
掃除は一日目に済ませて、二日目からは近くの海で遊び放題だった。

あれは二日目の夜に起こった。サチ、ユカ先輩が美術部恒例のイベントをすると言い出した。言うまでもない。肝試しだ。なんでも、近くの空き家になった洋館まで行って、置いてある猫の置物を取って帰るというもの。
くじ引きでボクが一番になった。いつものこと。マグライトを持って洋館に向かった。

夜空には満月。月明かりもあって、肝試しには最悪の夜。洋館の前に着く。
テラスがある典型的なアメリカンスタイル。
玄関らしきドアの前にビールケースを逆さにした台が置かれ、その上に猫のぬいぐるみが3個、置いてあった。
テラスに上がる階段の手すりには木彫りの猫の飾り物。
だから猫なのか。

手早くことを済ませようと階段を上った。最後の段でつまずき、転びそうになる。とっさに手すりをつかんでバランスを取った。
転ぶことはなかったが、手すりを掴んだ手には違和感が残った。
掴んだのは猫の彫り物。

少し動いた。
もう一度、猫を掴んだ。
回る。
猫は一回転した。

カチャリと音がした。

猫の彫り物が置かれた支柱の側面がパカッと開いた。
中には真鍮製の大きな鍵が一つ入っていた。
不意に足音。ライトを向けながら振り向くとそこにはミキの姿があった。
大きな悲鳴を上げて尻餅をついている。
案外、ミキは怖がりだと知る。ボクは手にした鍵を見せながら、これまでのことを説明した。

ボクとミカは辺りを見回した。玄関の鍵穴にも合わないし、他にこの鍵を使えるところはなかった。
「何しているの」と声をかけたのはカズ。
説明を聞いたカズは裏庭を指差した。
「あっちはどうかな」
空き家にしてはよく手入れされていて、裏庭との境には白い木製の垣根があった。垣根には扉があった。

垣根の扉の前で三人が悩んでいるとなかなか帰らない僕たちを心配して先輩たちが来た。
話を聞くと「あれのことかな」といって、扉を開けて、ずかずかと裏庭のほうに向かった。
裏には不思議なものがあった。
ただ門だけが置かれてその先には大理石で出来た見事な天使像が月の光に浮かび上がっていた。

門の前に着くとボクから鍵を奪い取った長身のサチ先輩が門の鍵穴に差し込んだ。

「カチャリ」

鍵の開く音がした。先輩2人が力いっぱい扉を開き始める。金属の軋む音。石の擦れる音。
扉が開ききると目の前にある天使像の台座にぽっかりと空間が広がっていた。ライトで照らす。
下に続く階段があった。

宝探しだ～と騒ぐ先輩二人を抑えてボクはその階段を下りていった。
しばらく降りていくと天然の洞窟のようになっていく。
一番下につくと目の前にまた扉が現れる。先輩から鍵を取り戻し、
今度は僕がその扉を開いた。
突然、潮の香りがした。目の前には崖で囲まれ、月明かりで輝く白い砂浜が現れた。

そこは秘密の砂浜だった。入り口はあの扉のみ。夜も遅くなったので5人は別荘へと戻った。
みんなを心配していた顧問の先生に事情を話すと、明日一番で洋館の管理人に連絡を取るといった。
次の朝は朝食もそこそこにみんなであの砂浜で時間の限り遊んだ。
楽しかった。とても、とても、楽しかった。

別荘からの帰り道、管理会社と連絡がついたと先生が言った。
後日、担当者が会いに来ると。鍵はみんなの意見でボクが持っていることになった。数日後、担当の弁護士という人が来た。
１０年前に亡くなった持ち主の遺言があると言った。それは洋館の

秘密を解き明かしたものにすべてを相続させると。

そしてボクはあの洋館の新しい主になった。ボクが未成年の間は引き続き管理をしてもらったが、二十歳になったときに正式に莫大な遺産と一緒に譲り受けた。

あれから、美術部の肝試しは洋館でのパーティーに替わった。

ボクは大学を出た後、あの洋館でペンションを始めた。一日一組限定で。

あの夏からもう何年もたった。

サチ、ユカ先輩は2人組みの前衛芸術家としてN．Yで活動している。

ミカは短大を出るとすぐに結婚した。

カズは夏の忙しいときには手伝いに来てくれる。未だに独身の理由もボクにはわかっている。

今年もまた夏が来た。

夏色の思い出がまた作られる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8938n/

夏の思い出

2010年10月11日18時00分発行